

生かす者(ルカ 13:1-9)

多くの人はそう願ってはいないでしょうけれども、傷つけたり、また傷つけられたりしながら人間関係に悩んでいます。そういう人が少なくありません。しかし、問題は信者の場合に、同じく傷つけたり、傷つけられたりということで悩む人が少なくないということです。そのとき信者の場合は、それを誰か、また何かのせいにしてはいけません。今までの癖のまま、タラッパンの用語で申し上げますと、今までのサタンのやぐらのまま、誰かのせい、何かのせいにしてしてしまうと、なかなか改善することができないのではないうえ。なので、信者の場合、そのような人間関係の悩みをもって誰か、何かのせいにする前に、信者、自分の中にまだ解けていない部分、つまり誤解などがあるのではないかということに気づくべきです。信者の内側に、まだ解けていない誤解というのはどうな内容なのでしょうか。まず、それに気づいて、悩んでいる人間関係にしっかりと向き合っていくようにしなければなりません。そうでないと、信者なのに未信者と一緒に、誰かのせい、何かのせいにして、ずっとその傷のままに囚われることになって、信者に与えられている人々を助けるべき使命とは程遠い人生を歩くことになってしまいます。

今日の聖書を見ますと、イエス様にある人たちが来て、どこかでガリラヤをいけにえの血に混ぜて殺してしまったという事件があり、報告をしたわけです。その時に、彼らが他の人より罪が多いから、罪深いからそうなったとみな思っているでしょう。違うんだよというふうにおっしゃっているわけです。また、何かの塔が倒れて下敷きになって死んだ人が何人かいるが、その事件に巻き込まれていない他の人たち、彼らより罪がないから助かったとみな普通に思っているのではないか。それは大間違いなんだよ。それは勘違いなんだよ。そのお話をしながら、それを聞いていた弟子たちに向かって今おっしゃっているわけです。あなたがたも同じ考え方、同じ見方ではないのか。その部分が変わらないといけないよ。それが信者として、教会なのにまだ解けていない部分かもしれませんという話をていらっしゃるわけです。みなそのように思っているのです。罪があるからああいう事件に巻き込まれただろう。ああいう災難にあったのではないか。そういうふうに思うわけです。それが一般的な見方、考え方というものです。世の中ではそれが通用するかもしれません。信者も今までそのような考え方を持って生きてきて、それが当然で当たり前だと思っていたかもしれません。しかし、そのままではいけません。そこを、その誤解を解いていかないといけません。それを知らないまま、そこが解けていないがゆえに、人間関係につまずくということを知らずに、未だに信者がつまずいた場合、誰かのせい、誰かが悪いから、何かのせいにしてしまうわけです。改めて、そういうことに囚われることなく、それを乗り越えて、勝利者として人々を助ける信者になるために、解けていないその誤解というは何なのかということを、聖書を通して神の御声を聞いて正しく理解していきたいと、そう願います。

1. 罪に対する誤解

それはなんなのでしょうか。今日の聖書から見られるように、第1、何が罪なのかに対しての誤解なのです。罪という言葉があり、みな知っています。しかし、何が罪なのかに対して、一般の人々が世の中で言っている、考えているようなことと、聖書が言っている罪とは全然違うのに、神の恵みによってクリスチャンになった信者であるにもかかわらず、罪に対しては誤解のままの人が多くいるわけです。また、教会の教派を見ていても、罪に対して誤解することで教派が分かれて、大きな希望を持っているにもかかわらず、その中身、内容を見ると、イエス様があなたがたは誤解しているだらうとおっしゃっているそのままの教派も少なくありません。だから、信者なのに信者としての力を発揮することが難しくなるわけです。残念なのは、そうでありながらも、そこに問題があると気づいていないわけです。気づかないと、結局は誰かのせい、何かのせいにするしかありません。そこに目に見えない悪霊がつけ込んで、その人の考え方を捕らえるということを忘れてはいけません。悪霊は目に見えないものなのですが、皆さんのが想像しているかのよう、ただお化けのよう、そういう感じではありません。キリストが抜けている考え方の中に100%入り込んで、その人

を牛耳るようになるものなのです。それを意識しないと、24時間キリストと告白するべきだという話がなかなか理解できないでしょう。

1) 罪を犯して罪人になる

罪に対してどのように誤解しているかと言いますと、今日の聖書からも見られるように、罪を犯したので罪人になると思っているのです。これが社会の見方です。

①律法を犯す

だから、法律によって、その法律を犯したものがその時から犯罪者や罪人になるという感覚なのです。必ず法律に触れたのかどうかでなくとも、一般的にもいろいろなルールがあるわけです。これを犯してしまうと、このラインを超えるとダメだと思っているのに、それを犯してしまう場合に、罪を犯した、だからお前は今から罪人なんだという見方、考え方なのです。ユダヤ人の場合は、神様から与えられました律法、神のみことばをその通りに守れないまま犯してしまった場合、お前は犯したから罪人なんだよと罪人扱いをするようになります。律法でなくても、先ほど申し上げましたように、私たちにさまざまなルールがあり、また文書になっている國の法律のようなもの、いろいろな決まり等々があります。別にそれを破ってもいいわけではありませんが、それを犯したので、その時からその人は罪人になるという感覚なのです。言葉を変えますと、そのルールを犯さず守っている限りは、まだまだ罪人ではないわけです。なので罪に対して、今日の聖書に書いてある通りに、何か災難にあったりすると、それは罪の結果なんだと思っています。

②罪の大小

なので、罪が大きい、小さいという風に分けて考えるようになります。何回も皆さんに申し上げることなのですが、ここで聖書にある話をしますと、皆さんのが、そのどこがおかしいのという顔なのです。それほど私たちは当たり前に世のやぐらというものに侵されているということに気づかないといけません。

③罪の多少

だから、罪に対して罪が多いか少ないかという感覚で分けて考えるようになります。本当にそうなのでしょうか。そうすると、クリスチヤンとしての役割は全うすることが難しくなります。

2) 犯した罪への報い

当然、そのような誤解をしているので、犯した罪に対して必ず報いがあるという考え方を持つようになります。罪を犯しますと、それに対して罰せられる、罰が当たるという考え方が一般的な考え方です。本当にその通りなのでしょうか。

①災難と苦しみ

それで、罪の程度によって災難に遭い、さまざまな苦痛や苦しみがその人を襲うようになると考えます。となると、どれほど罪を犯したから、あの人は、あの家庭は何の罪があるから、あのことになるんだろうと思うし、また、自分自身に襲いかかったときには、私はそんなに悪いことをした覚えがないのに、私が何をしたからといってこんなことになるんでしょうかと神に訴えるのですが、彼らが訴える神というのは漠然とした神、神でもないのです。結局自分自身に問いかけるわけです。自分が神だから、私そんなに悪いことしたのと。なんでこういうことがあるのと。ついついそうなってしまいます。

②罪の重さ量る

それで罪の重さを量ることになります。罪に対して誤解をしているとそういうことになり、今日イエス様に報告をした人々はそのような感覚であり、ユダヤ人、いや、当時ユダヤ人、そこにいるすべての人が同じ感覚だったので、その感覚をもって報告をしたので、イエス様はそれを指しておっしゃったわけです。あなたがたはそういうふうに思っているから、そのような気持ちで今報告をしているでしょう。だから、そうでない人は安全で、そうでない人は罪人ではないと言いたいのかとおっしゃっているわけです。だいぶ誤解しているのではないか。

3) 愚かな努力

罪のことをこのように誤解してしまうと、当然それに基づいて努力することになります。その努力が愚かなものになります。

①罪を犯すまい

どのような愚かな努力するかと言いますと、これも皆さんの顔がたぶん何がおかしいのという顔になる話なのですが、罪を犯すまいと努力します。犯してもいいのかという話ではありません。罪を犯すまいと、犯したら罪人になり罰が当たるから犯すまいというふうに努力するようになります。

②律法(道徳)を守ろう

もっとかっこいい言葉で申し上げますと、律法を守ろうとするようになります。律法を犯そうと思ってはいけませんよ。でも、このような努力は本当に望ましいことでしょうか。神様が求めていらっしゃることなのでしょうか。私たち人間に本当に必要なことなのでしょうか。罰が当たらないで、安全に成功ある人生を送るために、罪を犯すまいと努力して、律法と道徳と決まりとルール、掟をしっかりと守ろうとすることが、人生の成功への道なのでしょうか。特に先進国の場合、特に日本人の場合に、良い国民性を持っているのですが、すべてがこれに尽きるように生きてるのではないでしようか。それでよくやった、頑張った。子どもの教育もよく守った。よくやった。これからも頑張ろうね。そうでない場合は、何をしたのかになってしまっててしまうでしよう。それが一般論です。世の中の見方なのです。そのように、クリスチャンの親でも同じく教育をします。だから、子どもたちは、特に日本人の子どもたちは、小さいときからこれが骨にまで染み込まれ、そういう生き方をすることになります。それで、罪を犯す前にルールをしっかりと守ろうと努力し、それがある程度、うわべだけでしようけれども、守られたように見える人は褒められます。良い人間と思われます。だから、良い人間、悪い人間、汚い人間、綺麗な人間と分けて考えるようになるでしよう。クリスチャンでも。だから伝道につながらないのです。クリスチャンが、教会が、いのちの運動と関係ないまま流れてしまうことになります。良いことをやって良い子、良い子とすることが、キリスト教会の目的でも目標でもありません。キリスト教会は政治団体と経済界、学校ではできないいのちの運動のために存在するものなのです。しかし、罪に対して端からこのように誤解しているので、みなと一緒になるのです。できるだけ一緒にレベルを合わせようと。良い経験なクリスチャンの場合は、一般的のレベルよりもうちょっと上のレベルを歩こうではないかと、それがキリスト教会であるかのように。もう一度言います。日本の場合はそのように教会にまで浸透しているのです。教会は普通の人よりもっと優れた立派な道徳的な人になるために存在しているかのように。

③無駄な安堵と不安

どのような愚かな努力をすることで守ったとき、自分の基準で法律やルールや何かの決まりごとを破らずに守ったときには安堵するのです。安心します。それを人が見たのか見てないかは別にして、それを破って犯したとなったときには不安に陥ってしまいます。安堵と不安を行き来しているのです。普通の人はしようがありません。でも、クリスチャンでもそんな感じです。天国と地獄を1日で何回でも行き来するのです。それを教理にして教える教派もあります。この間、RTSの修練会に行ったときに、そこはさまざまな教派から集まってきて、タラッパンのためにワンネスになっているものなのですが、清め派出身の牧師が言うことを聞いてびっくりしました。彼らは本当にこの誤解の通りにうまくいったときには天国、救われたという確信があり、この誤解の通りうまくいかなかつたときには、もしかして私、地獄ではないのかといつも行き来するみたいです。緊張の中で人生を一生、生涯を歩いていくという感じです。なかなか守れない場合は諦めてしまう。他の人よりもある程度守った人は、少し優越感に浸ってしまう。パリサイ人とどこが違うのでしょうか。神様は私たちを、本当に惨めな私たちを召されました。いくら私たちが惨めな人間であっても、神に召された以上、神様の尊い計画があり、ミッションがあるはずなのです。暗闇を碎いて、暗闇に捕らわれているたましいを生かし、そのたましいがまたいのちの祝福にあずかることで、他のいのちを生かすことができるようになる、そういうミッションが私たちにはあるはずなのです。でも、20年、30年教会に通っていても、その話はもつともな話なのですが、私とは元々縁のない話のよう

に、礼拝に真面目に出席して、献金をしっかりと捧げればそれでいいのではないか。それは特別な誰かがやることだとなってしまいます。その理由の一つが、今日の聖書にあるように、いちばん基本的な罪に対して誤解しているからです。

④キリスト拒否

無駄な安堵と不安を行き来するということは、罪をテーマにして誤解しうろちょろすることによって、結局、結果的にキリストを拒否することになります。キリストの方に来れなくなります。誰のしわざなのでしょうか。自分なりには清い人生を送ろうとして頑張っているつもりなのでしょうが、靈的に見ますと真逆のことなのがちなのです。なりかねないです。今日イエス様が怒りをあらわにしながら、事故に遭った人とそうでない人とそんなに違うと思っているのかということをおっしゃることの裏側には、なぜキリストはここにいるのに、キリストを信じることを排除して、罪がああだこうだということばかり言っているのかという話なのです。あなたがたは、罪が何か端から誤解して間違っているんだよと。罪をこのように誤解しているから、クリスチャンなのに人間関係に耐えられないのです。受け入れて、超越して、その人のために祈るべきなのに、罪があるない、大きい小さい、多い少ない、罪なのかそうでないのか、どこが悪いのか、良いのかいうことばかりなのです。そのように考えて判断している。自分もそのようにさばかれることも知らずに。それが罪に対して誤解している人々の人生のありさまなのです。

2. 罪に対する正しい理解

そこでイエス様がおっしゃったのは、罪に対して正しく理解してほしいという意味がそこにはあるのです。罪は一体何でしょうか。どのように聖書は私たちに教えているのでしょうか。

1) 罪人だから罪を

罪を犯したから罪人になるのではなくて、罪人だから罪を犯すことになると。

①律法を守れない

つまり、律法を守れないから罪人ではなくて、端から、最初から律法などを守ることが不可能な罪人なのです。なのに、なぜ律法を守りなさいとおっしゃったのか。それは律法の解釈が間違っているからなのです。神様が律法をモーセに与えられる前に、それ以前にアダムに福音のみことば、約束を与えられて、アブラハムにもその約束をおっしゃいました。そのあと、モーセの時代に文字になった律法を与えられ、律法を守れるか守れないかしっかり見なさいよということと、その律法を通して、結局キリストを信じる信仰の方にたどり着くために許されたものなのです。それが律法です。それを知らずに、律法が与えられているから守ろうではないか。守れないことを知らずに。だから律法を守ろうと思うことは傲慢なのです。罪が何かわかつていないから。良い人間になろうという発想自体が傲慢で無知なのです。なぜそうなるのでしょうか。神を離れて、人間そのものが神になっているから、なんでもかんでもできると勘違いしてはいるからなのです。来週も再来週もそういう話をすると思いますが、人間最高に対して聖書は真逆のこと、人間絶望と叫んでいます。その戦いです。なのに、教会が世の流れに一緒に流されて乗ってしまうのです。それが今までの教会の失敗の歴史なのです。

②罪の症状

罪を犯したので罪人になるのではなくて、元々罪人だから罪を犯すようになるし、端から律法を守ることができないし、持っている罪、罪を犯したということは、その元々の罪があらゆる症状として、何かをきっかけにして表に現れるものなのです。私たちはそれしか知らないので、その現れている症状を見て、罪、罪、罪と言うのですが、罪の実が実ったことなのです。症状なのです。

③すべてが罪

そういう意味で、罪を正しく理解した場合、人のやることなすことすべてが罪なのです。受け入れがたいのです。これが人間の罪の本性です。今の話を聞きたくないということが罪の裏返しなのです。それが罪です。すべてが罪なのです。

聖書が言っていることを見たいと思います。

創世紀 6:5 を見ますと「主は、地上に人の悪が増大し、その心に図ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった」。私たちはこれを見ながら、なるほど、ノアの時代はすべての人が 24 時間墮落のことばかり、盗みばかりというイメージで思うかもしれません。

そんなことはありません。子育てもしているし、子どもをしっかりした人間に育てよう。それは罪でしょうか。罪ではないでしょうか。子どもを育てることは罪ではありません。でも、なぜ立派な人間に育てようとするのでしょうか。立派な人間に育てると、それで幸せな人生になると思っているからでしょう。キリストがなくても全部が罪なのです。クリスチヤンはこのような感覚を持っていないといけません。

もう一つ、ローマ 1:28 「また、彼らは神を知ることに価値を認めなかつたので、神は彼らを無価値な思いに引き渡されました。それで彼らは、してはならないことを行っているのです」と。神様がそのまま悪のまま放置したという意味の話です。悪のまま神が手を出さないと、全部が悪なのです。それが人間です。神様を離れたということがどれほど恐ろしいことなのかに気づいて認めないといけません。皆さん、海賊船の話を聞いたことあるでしょう。海賊船。悪いことするための船。そこに乗っている限り、その人が一生懸命真面目に頑張っていることが罪なのです。海賊に役に立つわけですから。世の中ではそのような罪の理解が全くございません。聖書にのみ教えられているものなので、皆さんにこれをしっかり聞いて、罪を正しく理解し、皆さんの内側に先にこの植え付けられていた罪に対する誤解のやぐらが碎かれることがない限り、みな未信者と同じく人間関係につまづくようになります。その人を生かすために許され、そこに遣わされている者なのに、どんなに悪い人間でも悪いという定義は何でしょうか。イエス様がおっしゃいました。人の目にある塵を見ながら、自分の目にある針は見ないと。何が悪いものでしょうか。そう言っている自分は悪くないと思うからでしょう。それが根本からの勘違いなのです。これが聖書が教えている罪というものなのです。

2) すべての人は罪人

ということで、この罪を正しく理解しますと、すべてが罪であると同時に、すべての人は罪人なのです。

①ローマ 3:10

ローマ 3:10 「節「義人はいない。一人もいない」。これはユダヤ人と異邦人のすべて全部合わせて結論のところで言っていることです。

②ローマ 3:23

どこの国、どこの時代の人でも、すべての人は罪を犯したので、神からの栄誉を受けることはできない。これが聖書が言っている罪というものです。

③エペソ 2:1

エペソ 2:1、自分の罪過と罪との中にあって死んでいた者であって。それがいつからでしょうか。生まれながらなのです。

④ヨハネ 8:44

すべての人が、罪人というのは、靈が死んだままの状態で、あなたがたはあなたがたの父である悪魔から出たものである。自分のお父さんが悪魔なのです。誰がでしょうか。すべての人類がそういう身分のまま、ルールを守ったから、その人は綺麗な人、ルールを破ったから、あの人は汚い人と言えるものなのか。あなたがたは自分が誰なのか全く分かっていない。神を信じないこと、キリストを拒否することこそが罪の中の罪になります。概念を変えないといけません。皆さん、昔のさまざまことで心の傷などトラウマなど持っている人はいないでしょうか。なぜなのでしょうか。その人が罪人で、その人が悪いから。その何かが、と思っているからでしょう。裏返しますと、私はそうでないのに、その人も悪魔の子であり、たましいが死んだ人間なので、悪魔に操られて私が傷を受けるしかなかった。そういうことをやらかしたわけです。だから、あの人にキリストが必要なのです。分かれば憐れむようになります。憎んだり、心の憎しみを持って傷のままではなくて。そして、自分でもそういうことがあったとしても、あるから自分が心の傷を負ってボロボロダメにな

ったわけではなくて、それをしっかりと受け入れて、全部益に変えることができる力がなかった。人間にそういう力があるのか。神がともにおられる人には、御座の力によってそれが可能になります。私たちの歩く旅程は、すべてが益となる御座の秘密の旅程と聞いたでしょう。その代表的なケースがレムナントの7人なのです。特にヨセフの場合、心の傷になるしかない事件がいっぱいあつたにもかかわらず、すべて乗り越えることができました。ヨセフが偉いからではありません。主がヨセフとともにおられたので、つまり私が傷を負ったのは、誰かの酷いことがあったからではなくて、自分がヨセフのように神がともにおられる神の子どもではなかったので、つまり神を離れて悪魔の子どものままだったので、たましいが死に、そのすべてが悪魔の操りによって傷に変わっただけなのです。だから私にもキリストが必要なのです。私のせいでもありません。これが罪の理解です。偽りの父である悪魔は、このように福音の光が照らされて考えることができないように、未だにずっと昔のまま、間違った罪に対する誤解のままで、その人の考え方を捕えて滅ぼそうとしているのです。クリスチャンとして、その傷だらけだったものが全部土台に変わり、感謝に代わって、同じく悩んで騙されている人々におあかしをして助けるための材料になるはずなのに、そうならないように。

3) 神様の恵みのみ

なので、罪を犯す前と努力したり、律法を守ろうと努力すること、それが求められるのではなくて、端からそれが不可能なので、神様の恵みによってのみ罪は解決されるものなのです。自分が犯すまいと頑張るから犯さないわけでもないし、犯さなかつたとしても罪人なのです。

①神様の愛(ローマ 5:8)

聖書はこう言っています。しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれることによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。ローマ 5:8、つまり、神の恵みというのは、無条件の、不思議な、私たちの理屈では説明できない、計算できない神の愛によってのみ、私たちは罪の問題を解決することができます。私たちの方からは方法はありません。道はありません。

②神様の贖い(マルコ 10:45)

マルコ 10:45 には「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです」。私たちの罪の問題は、犯すまいではなくて、罪人の私たちの身代わりとして、罪のないキリストが贖いのいけにえとして死ぬことのほかには解決の道がありません。誰かのせい、なにかのせい、他は何も見えてはいけません。守るべきなのか、守ってはいけないかなど一切気になってはいけません。キリストの罪のない、キリストのあがない以外には、自分の罪、誰かさんの罪、それは解決できません。なぜでしょうか。罪は、私たちが思っているそういうものではありません。罪イコール悪魔の子なのです。何かをしたから罪深い人間とか、そういう次元の話ではありません。

③神様の赦し(ヘブル 10:17-18)

神が愛をもってキリストを十字架に引き渡すことによって、ヘブル 10:17-18 「わたしは、もはや彼らの罪と不法を思い起こさない」と言われるからです。罪と不法が赦されるところでは、もう罪のきよめのささげ物はいりません。神様がこのようなキリストの贖いを通して、私たちの罪を赦すこと以外に希望はありません。自分の罪をどうのこうのというのは、最初から勘違いなのです。神様がすべてなさいますし、それ以外に希望はありません。

④キリスト(ヨハネ 19:30)

だから、このような神の恵みが、キリストが実際に世に来られて、そのキリストであるイエス様が自ら十字架にかけられて、このような罪の問題の解決をすべて完了されました。その十字架のほかには、罪の解決の方法、道などはどこにもありません。

⑤信仰(ローマ 1:17)

なので、私たちの方からは、このような神の恵み、それを全うされたキリストを信じて受け入れることだけが希望であり、罪の問題を解決する唯一の道なのです。義人は信仰によって生きると言われるゆえんがそこにあるということをぜひ覚えていてください。

今日短く申し上げましたけれども、本当は神学的にものすごくややこしい部分があるものなのです。でもそのように言わると余計複雑になるので。でも、罪に対して自分は本当に聖書が教えている通りに理解しているのか、もしかしたらクリスチャンなのにまだまだ誤解している部分があるのかということを吟味しない限りは前に進むことはなかなか難しいです。キリスト以外に何も見えてはいけません。人々の悪さやさまざまな問題を見たときにもキリストの他には見えてはいけません。だから教会はバラバラな人間が集まっていても同じことを語るところなのです。問題は一つ。答えはキリスト一つ。長老さんが相談に乗っても、牧師が相談に乗っても、みな同じことしか言わないので。あまりにも単純すぎじゃないかと心配する信徒がいますが、その心配は無用です。単純すぎるようにならないから教会に力がないわけです。余計なことを言ってはいけません。麻薬に依存している人が来たときにも答えはキリストなのです。離婚の危機の人が来たときにも、親の虐待や親に無視された子どもが来て泣いているときにも答えはキリストなのです。表に現れている症状、それが問題ではありません。それを知っていて、それを教えてあげることができるところは、教会のほかに宇宙に存在しません。だから教会は尊いところなのです。いろんな弱さがたくさんあるにもかかわらず、それを知っていて、それを語るために一緒に集まってワンネスになっている信徒は家族よりも大切な存在です。いのちによって結ばれているのですから。それを教会のコミュニティというのです。でも、自分が個人的にこういうテーマに対して誤解しているとワンネスになるはずがないのです。何かあるたびに喧嘩ばかりな彼らみたいに、塔が倒れて下敷きになって死んだ人はもっと悪い人間、彼らはそこまでいかないと、喧嘩になるしかありません。意見の一致などは期待できません。サタンのしわざなのです。教会を潰そうとして。分かっている人は、教会で大声を出すことなどありえません。自分の意見を主張することもありません。もちろん牧師は講壇で大声で言うのは許してください。これ別の意味だから。

では、そういう意味で、罪を正しく理解している者は、人を生かせるようになります。だからクリスチャンは生かせる存在です。罪を誤解している者は、今日の聖書に書いてある報告の人のような感じになるのです。そういう意味で、今日から皆さんには、まず罪に対して正しく理解して、自分自身を生かせるようにしないといけません。大小のすべての過ちを根本を見る材料にしてください。それでキリストを信じる信仰だけを条件にして、自分の存在を改めるように。罪を許され、解放されて祝福された者だと自分の存在を正しく改めないといけません。それに釘が刺されるほど、繰り返し繰り返し告白しながら集中しないといけません。ということで、いかなる罪責感、罪悪感からもすべて解放され、自由にならないといけません。これは図々しくなる、正当化するという話とは違います。しかし、誤解している人から見ると図々しく見えるでしょう。それはしょうがないです。1年生が大学卒業する人を見て誤解することはしょうがありません。それに右往左往、揺さぶられるようなことはいりません。ローマ7:24からこう書いてあります。「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します」。皆さんがどのような罪悪感やどういう罪責感などがあつても、このようにすぐに私たちのキリストを通して、キリスト以外には見えてはいけません。「神に感謝します。こうして、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」。キリストがその罪のために、私のために、十字架で死なれました。「なぜなら、キリスト・イエスにあるいはのちの御靈の律法が、罪と死の律法からあなたを解放したからです」。昔の訳より今の訳の方がいいですね。昔は罪の原理からと言いましたけれども、法律の方が分かりやすいですね。法律は法的にもう終わったことなのです。なので、このようにすべての罪悪感から自由になることで、なぜでしょうか。キリストのゆえに。皆さんのが何かを守って、もう少し皆さんの内側を清め整えたからではなくて、キリストのゆえにキリスト以外には何か気になってはいけません。それは罪に対してまだ誤解しているからなのです。

それで、自由になることでどこに進むのかというと、自分の中に神の国が建つように大胆に祈るべきです。でも、まだいろんなことが引っかかっている場合は、「神様、御座の祝福が私のものなので、私の内側に」と祈ろうとしても、引っかかって、後ろめたさなどがいっぱいあって、大胆に進むことができないです。私のような人間がそう祈ってなんになるのかとつい思ってしまう。それが悪魔のしわざなのです。罪に対して誤解しているからです。罪を理解して自分を生かせるように、皆さんの中には神の国が豊かに建つように約束されています。神の国が建ちますと、サタンのやぐらが全部碎かれるのです。自我というやぐらが、肉とこの地上のもの、世の欲望や未練など全部碎かれて、宗教、律法などが全部碎かれて、動機、また比較すること、ヒューマニズム等、全部碎かれて。なぜなら CVDIP のやぐらが建ちますと、動機も誰かと比較することも負担も全部いりません。それから神の国が建ちますと、不信仰、言い訳、不平不満などが全部碎かれます。神の力が私のやぐらですから、人を生かすいのちのやぐらが建つようになります。暗闇を碎く権威のやぐらが建つようになります。それが神の国です。まるで私が動きますと、神がそこを動くようなことが起こることになります。御子のかたちに変えられた者なので。それを大胆に祈り味わうべきなのに、まず罪に引っかかっているからそこに進めないです。死ぬときまで信者なのに、そこをうろちょろちょろし、罪悪感が安堵と不安を行き来する。もう終わりにしないといけません。自分を生かすように。

それから、そうなった人が、問題のある人、現場を生かせるようになります。問題のある現場、人々を見て、批判もさばきもせず、正当化もせずに、私と同じようにキリストと出会わせるために、神様が許された問題として見て、彼らに神の国のことがなされるように。神の国のことはなんでしょう。福音が正しく明かされて、聖霊の力が臨まれ、今まで彼を捕らえていた暗闇の力が碎かれ、いのちの働きがなされること。それを神の国のことと言います。なされるようになります。私たちは人を生かせることが可能な存在です。ただ罪に対して誤解しての限りは、まず人間関係につまづいて、自分が傷を負って、あるいは傷をつけたりという段階では、自分も生かせないし、人も生かせることができません。なので、ぜひ今日の聖書を通して、罪はなんなのか。なるほど、誤解してたんだねと。イエス様がおっしゃいました。狭い門に入りなさい。この話は絶対理解できない話です。神に定められた人にしか理解できないものなのです。皆さんのが祝福の主人公であることを信じて、確信して、自分の内側でこの内容を修正して、残りの生涯、自分が生かされ豊かになって、人を生かせる人生を歩むことを祈ります。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。私たちは生まれたときから悪魔の偽りに騙されて、罪に対しても勝手に勘違いして誤解していました。クリスチャンになってからも、その誤解が解けないまま人間関係につまづくことが多くあり、何が理由で原因なのかも知らないで迷っていました。今日のみことばを通して罪を正しく理解して、キリストだけが残り、確信と感謝の上で神の国を祈り、また神の国のことがなされるその祝福を体験するように、生かせる者として、残りの生涯を歩けるように祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。